

■ 緊急度と重要度、

小さな山に登ると大きな山に登れなくなる

修正： 2021.02.01

投稿： 2021.02.01



- 緊急度と重要度、小さな山に登ると大きな山に登れなくなる①

去年よりも面倒くさがりになってきたかな～
と思う今日この頃です。…。(￣д￣)
これはもしや老化と言う現象なのでは？！

//-----

仕事の分け方として、
「**緊急度**」と「**重要度**」で分ける分け方があります。そして、
緊急な仕事は小さく、重要な仕事は大きい傾向にあります。

だからこそ、**緊急な仕事よりも重要な仕事にこそ手を出そう！**
と言われているわけです。が、人は、何かと、
急ぎの仕事に対して反動的に手を出してしまいがちです。

職場においても急ぎの仕事は、
上司「**これは急ぎだから速く対処しろ！(；・`д・´)**」
と急かされるものです。ので、

部下「**分かりました。すぐに対処します！(° o°)**」
と反射的に対応してしまいがちです。が、
そうして急ぎの仕事を優先的にこなしていると、…、

再び急ぎの仕事が依頼される！

という終わりのない無限ループに入っていくことになります。
仮に、今やっている急ぎの仕事が速く終わったとなれば、
上司「**今、手、空いてる？**

この仕事の方が急ぎだから、こっちを先にやって！」
といった具合にすぐさま別の急ぎの仕事が割り込んできます。

仕事が速い人ほど仕事がどんどん入ってくるというわけです。
理不尽だ！と思うかもしれませんが、これが職場の現実です。

処理すれば処理するほど急ぎの仕事は増えていきますから、
燃え尽きて音を上げるまで、急ぎの仕事は無限に増殖していきます。
まるで癌細胞です。…。

職場における生産性がなかなか上がらないのも、
こうした急ぎの仕事に反応的に取り掛かり、慢性的な残業が発生し、
心身ともに疲弊させられてしまっている点が大きな原因です。

(続)

//=====//

●緊急度と重要度、小さな山に登ると大きな山に登れなくなる②

急ぎの仕事はこなせばこなすほど、より一層、
急ぎの仕事が増えてしまい、ますます忙しくなってしまう、
ということでした。

職場において、上司からすれば、急ぎの仕事はしょせん
作業の一つにすぎないため、実は、急ぎの仕事をやっている限り、
(抜きん出て)高く評価されることはないのです。

であれば、いっそのこと、
急ぎの仕事はあえて放置しておくのも手です。
というより、そもそもその急ぎの仕事、

本当にやる必要があるのでしょうか？

よく考えてみると、別にやらなくてもよくない？
と思えるタスク、意外と多々あるはずです。

人は、**急かされると**、
「やらなければ！」と思い込んでしまうものです。が、
後から振り返って冷静に考えてみれば、

別に「やらなくてもよかった」ことに気づきます。

振り込め詐欺では、

「今から〇〇時間以内に入金してください！」と、

期限を設けて相手を急かしつつ振り込ませます。

冷静に考えさせないためです。

同様に、お客様から急いでやってくれとか、

上司からこれは急ぎのタスクだからと言われると、

「急いでやらなければもっとまずいことになる！」

と勝手に強迫観念に駆られて、とにかくその急ぎとされる仕事を

一刻も早く自分のタスクから取り除こうとしがちです。が、

一度立ち止まって、

「本当の本当の本当にこれ、やる必要あるのか？」

と疑問に思うことが大切です。

でなければ、効率よく急ぎの仕事をこなしてしまうことで、

この人は急ぎの仕事を効率よくこなす人だと評価され、

また急ぎの仕事がきたときに、「急ぎだからよろしく！（￣▽￣）」

と何となく急ぎの仕事を振られてしまうようになります。

（続）

//=====//

● 緊急度と重要度、小さな山に登ると大きな山に登れなくなる③

職場には「緊急度の高い仕事」と「重要度の高い仕事」がある、

ということですが、「緊急度の高い仕事」については、

できる限り減らしていかなければなりません。というのも、

実は、**急ぎの仕事というのは、割に付加価値が低い**傾向にあるからです。

急ぎの仕事ばかりしている職場に限って残業が慢性化しており、かつ、社員の離職率も高く、だらだらと仕事している人がたくさんいます。

ということで、同一賃金で短時間労働を実現するためにも、「重要度の高い仕事」の割合を上げていかなければなりません。

まずはタスク管理に「重要度」という軸を取り入れて、

「やった方がいい仕事」と「やらなくてもいい仕事」

に分けていくところからです。…。が、しかし、

こうした考え方は、一般的になかなか受け入れられません。

というのも、重要かどうかを勝手に判断すると、

「お前らの好き嫌いで勝手に判断するな！」と

上司から注意されるからです。となれば、

「上司の言うことはすべて重要だ！」と

部下は認識するようになり、すべてのタスクは

緊急度だけで判断されるようになります。

「働き方改革だし、無駄なことはしないように！」

と上司が号令を出しても、部下が勝手に判断できない以上、

やれと言われたことはすべて重要な仕事ということになります。

仕事とされている以上、「やらなくてもいい仕事」というものはなく、

すべてのタスクは「やらなければならない仕事」となるのです。

こうしたことを踏まえ、それでも労働生産性を上げるべく、

緊急な仕事よりも重要な仕事の割合を増やしていきたい、

と言うのであれば、**組織として**取り組んでいかなければなりません。

緊急度と同程度に重要度の大切さを認識させ、

重要度を軽んずることがあれば、緊急度を軽んじた場合と同様に注意し、

重要度を重んじる風土を作っていかなければなりません。

(続)

//=====//

● 緊急度と重要度、小さな山に登ると大きな山に登れなくなる④

大きな仕事がしたければ、大きな仕事をしていかなければなりません。
小さな仕事ばかりしては、小さな仕事ばかり入ってくるようになります。

小さな仕事というのは、納期が近い仕事のことです。

それは緊急度の高い仕事ということです。

つまり優先度の高い仕事ということです。でも、よく考えてみると、

その仕事は本当に優先度の高い仕事なのでしょうか？

その仕事はどれだけの収益をもたらすのでしょうか？

いや、そもそもそれはやる必要のある仕事なのでしょうか？

仕事という名のどうでもいい雑務ではないでしょうか？

当然ながら、小さな仕事ばかりしては、大きな仕事はできません。

一つの小さな仕事を終わると、自動的に、

一つの小さな仕事が入ってくるようになっているからです。

自分から掴み取らない限り、大きな仕事は入ってきません。

大きな仕事は、小さな仕事の延長線上にあるわけではない、

ということです。どんなに出世しても株主になったりはしないように、

小さな仕事の延長線上には小さな仕事しかありません。

世代は違ってもやっている仕事内容は同じ、

ということは割とよくある話なのです。

小さなことをコツコツやった結果としてそうなるのが現実です。

もし本当に、大きな仕事がしたいのであれば、
今やっている小さな仕事は早々に手放して、**できる限り早く、**
少しでも早く、大きな仕事を掴み取っていかなければなりません。
刻一刻と自分の寿命が減っていることを忘れてはいけません。

残された人生を何に使いますか？

小さな山に登ると大きな山には登れなくなります。
大きなことがしたければ最初から大きなことをしなければならないのです。
大事を小事の犠牲にしていはいけないということです。

(続)

//=====//

● 緊急度と重要度、小さな山に登ると大きな山に登れなくなる⑤

ここまで、緊急な仕事の比率をできる限り減らし、
重要な仕事の比率を増やす方針で説いてまいりましたが、
緊急な仕事は完全になくすることはできません。それどころか、

重要な仕事よりも緊急な仕事の方が比率は高くならざるをえません。
そして、大切なのはその**比率**ですが、比率については、
緊急度・重要度マトリックスの概念が紹介されている書籍「7つの習慣」にも
特に明記されていないので、私は勝手に **75:25** を最良の比率としています！
(75:25 ← 何とも素晴らしい比率です)

で、こういった観点からスケジュール管理するのであれば、
実際にどれだけのことをやったのか、
集計を取って反省もしていかなければなりません。

「やろう！やろう！」と言っていたことが、
いつの間にか途中で消えてしまうことはよくある話です。
しかし、常に結果を集計し、定期的に観測していれば、
そろそろ努力しなければならない状況を把握できます。

「それでも努力する気力が湧かない…。(´・ω・`)」
というのであればそもそもどうしようもありませんが、
いつのタイミングでどれだけ努力すればいいか分かれれば、
後は**役割分担しておけばとりあえず進む**ものです。

というのも、人間には、
他の人に迷惑をかけたくないという気持ちが強くあるので、
自分がここで後回しにすれば他の人に迷惑をかけてしまう、
となれば、気力を掘り起こして一踏ん張りするものです。

ここで、タスクの割合としては、

- ・緊急なことに 75%
- ・重要なことに 25%

の比率であることが理想的ですが、現実的には、

- ・緊急なことに **90%**
- ・重要なことに **10%**

がいいところです。

しかしそれでも効果的だと言えます。
0%でない以上、少なからず効果はあるわけですから。

(完)

//=====//

Web サイト：

データアクションサービス —データからアクションを起こす—

著者：

時無 和考(Tokinashi Kazutaka)